

「2019年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学経済学部・経済経営学科4年 増田祐

私がこのプログラムの参加を志望したそもその理由は、グローバル社会が加速する現代において自文化のみしか知らずに生きていくのはナンセンスであり、今のままでは社会人として活躍出来ないと考えていたからだ。よって文献やネットによる学習だけではなく、実際に現地に赴き、その土地の文化・国民の価値観に触れてくる「生の体験」が必須であると考えた。

そしていざ実際にこのプログラムに参加してみると驚きの連続であった。まず第一に驚いたのはタイの発展度合いである。チュラーロンコーン大学の近くにはデパートがいくつも立ち並び、どのデパートの内装・外装も華やかで清掃が行き届いており、日本のデパートをこえているのではないかと思うほどであった。

そして次に驚いたのは、その華やかさとは一転、一步街から踏み出すとまだまだ貧困を感じられる街並みやインフラが整っていない環境が存在するという事だ。道に物乞いの人やいたり、上下水道や道路の整備が十分に行き届いていなかったりと、このあたりはまだまだ発展途上国らしさを感じ、格差を感じる部分でもあった。

さらに驚かされたのはチュラーロンコーン大学の施設としての充実さである。まず単純に驚くほど広い。バンコクの街の中央部にありながら約2.1平方kmの面積がある。また、最新式の器具が揃った広いトレーニングルームがあったり、なんと大学の中でマーケットが開かれていたり大学というより1つの街であった。単純に優劣をつけることは出来ないがあらゆる点で日本の大学とは大きく異なっていた。

そして最も驚かされたのはタイ人らの温かさである。一緒にプログラムを共にした現地の学生たちは、彼らの授業が終わった後や休日でも我々が観光に行きたいところをつきつきりで案内してくれたり調べたりしてくれた。そのことに深い感謝の念でいっぱい、もし彼等が日本に訪れる機会があったら、その時は精一杯歓迎しようと思心に決めた。プログラムの修了式でその旨を述べると、チョムナード先生はこう答えた。「彼等は別に見返りを求めてやっている訳では無い。京都大学のプログラムに参加した際もあなた達は見返りを求めず無償で彼等に優しくしてくれましたよね？それと同じです。そうして今度は私達が恩返ししよう。その次はあなた達が恩返ししようと思うようになり、相乗効果的に友好な関係が築けるのです。」と。私は国際関係の本質的に重要な要素がこの言葉に詰まっているのではないかと感じた。損得勘定抜きに困っている人がいたら助けよう、優しくしようという精神が根本的に重要なのだ。これはなんにも国際関係に限らず普段の人間関係に関しても同じである。

今まで海外経験は何度かあったがいつも友人や家族と共に行動し、現地の人々と積極的に文化交流する機会というのはほとんどなかった。そういう意味で、このプログラムは本当にこの上なく充実していた。エメラルド寺院や古都アユタヤを実地見学しに行き、その荘厳さに胸を打たれ、タイ料理を実際で作って食し、タイ語を拙いながらもある程度話せるようになった。どの授業も教師の方が非常に親身にそして面白く授業してくださったので退屈など全くせず積極的に楽しんで学ぶことが出来た。また、現地の学生との共同発表の際はまず彼らの日本人と遜色ない巧み日本語に非常に驚いた。率直に言って京都大学の学生が用いる英語のレベルとは一線を画していた(日本語専攻ということもあるが)。そんな彼らと取り組んだ共同発表は彼らの積極的な協力と好奇心も相まってスムーズに進めることができ、充実した発表が出来た。概してこのプログラムで得た最も大きなものはタイの文化を知ること(異文化理解)によって日本の文化を相対的に理解を深めること(自文化理解)が出来たことだ。この貴重な経験を自身の血肉に変え、社会に貢献出来る国際人間として今後活躍していきたい。私は既に就職先が決まっており、今から進路が変わるということはないが、それでも今後働く上で今回の経験は必ず社会人として活かせると確信している。